

マラルメの社会時評 — 「孤独」、「対決」、「宮廷」、「庇護」

岩 田 駿 一

かれこれ四半世紀前のことになる。1985年の『教養諸学研究』に、「『三面記事』から『黄金』へ—マラルメ後期散文の錬金術—」という拙論を掲載してもらった。ステファヌ・マラルメが死の前年1897年に刊行した散文作品の集大成『ディヴァガシオン』翻訳・注釈・解説の試みの一環として、当時まだ邦訳が出ていなかった「大三面記事」と呼ばれるセクションから、まず着手したのである。「大三面記事」（「重大雑報」とも訳す）という一種の矛盾語法で表わされるこのセクションは集中の第X部（最終部）をなし、全部で9篇のテキストから構成されている。翻訳・注釈作業はさほど時をおかずに一段落つくはずであったが、ぐずぐず手間取っているうちに日本語訳『マラルメ全集』（筑摩書房、『ディヴァガシオン』を含む第2巻は1989年2月刊行）が陽の目を見た。しかしマラルメのテキストはきわめて多義的で、ときには相反する解釈さえ誘発する仕掛けになっているから、そこに示されているものとはずいぶん違う自分独自の読み方を提出するのでも許されようと考え、そのまま翻訳・注釈作業を続行することにした。だが相も変わらず一向に仕事は捗らず、第X部のちょうど真ん中、第5篇目に位置する「牧歌調」⁽¹⁾で、未だに中断したままだ。

生来の怠け癖が災いしたことは言うまでもないが、実は1985年の段階で『ディヴァガシオン』集中の約3分の2のテキストの日本語訳は曲がりなりにもほぼ成っていた。あとは訳文を磨き、必要な注と解説をつければ済むと思っていた。高をくくっていたのがその後の遅延に繋がってしまったのかもしれない。だがそれだけが理由ではない。マラルメを読みながら、いくら丹念に読み

込んでも読み解けない、異物が澱のようなものがつねに残るのを感じていた。絶えず不透明感、不全感に付きまといられるのは、詰屈な統辞法を駆使して、アイロニーを縦糸とし、パラドックスとユーモアを織り込んだマラルメ特有のテクストの扱い方が、未熟なためだろうとばかり思っていた。そうしたテクストを読み解くには、どのような方法がもっともふさわしいのか。迷いながら試行錯誤を重ねているうちに、時間が経ってしまったのである。

その間に1998年、マラルメの没後100年を迎え、注目すべき催し物や出版物が次々に現れた。中でも特筆に値するのはプレイヤード叢書で半世紀ぶりに装いを新たにお目見えした『マラルメ全集』⁽²⁾だ。『ディヴァガシオン』は2003年刊行の第2巻に収められている。

この新全集は本文校訂の上で旧版とは比較にならぬほど進化している。テクスト研究の蓄積された諸成果はもちろん、旧版以降に発見された自筆原稿や校正刷り、プレオリアルなどが能うる限り幅広く、そして正確を期して盛り込まれている。今後のマラルメ研究はすべてこの新全集版テクストに依拠することになろうし、従来の研究もそのいくつかは見直しを迫られるかもしれない。

さてそこで、筆者自身のマラルメのテクストに対する姿勢、読み方の変化が問題になってくる。ここ四半世紀の時代の動向とマラルメ研究の変遷に伴い、筆者自身がマラルメのテクストに向かうときの姿勢、読み方も次第にずれてきて、とうとう見過ごせないところまできているのを感じず。今回改めてマルシャル校訂のプレイヤード版マラルメ全集の「大三面記事」部門を、ノート、異稿、異文も含めて読み返し、すでに発表済みの「黄金」、「非難」、「修道院」、「魔術」、「牧歌調」の翻訳と、まだ手元に置いたままの「孤独」、「対決」、「宮廷」、「庇護」の訳稿を照合していて、1985年に「黄金」を、のちに「非難」、「修道院」、「魔術」を取り上げたとき心に浮かんだもやもやとした蟠りが、はっきり形をとってくるのを感じたのである。

マラルメの書き直しだが、すでに書き上げてあるテクストに反省的操作を加え、語句や表現を作者の意図する内容や形式にいつそうよく適合するよう修正

するという、一般的な「推敲」の基準に、とうてい収まりきれないものであることは分かっていた。たとえば第1篇「黄金」の元記事は当時フランスの政・財界の屋台骨を揺るがせた一大疑獄「パナマ運河事件」の顛末を報告するルポルタージュだが、元記事の本体であった時事的要素、全体の3分の2に及ぶパナマ事件への言及はバツサリと切り捨てられてしまう。すでに1987年、バーバラ・ジョンソン⁽³⁾は「黄金」のテキストの大幅な削除・圧縮作業に触れてこう述べていた。パナマ運河疑獄事件は、初出時には限られた文化的一時期に縛られた形でテキスト外にあるものとして言及されていたが、その歴史的特殊性を抹消されることにより、テキストの構造そのもののなかに、とりわけその余白に、刷り込まれることになる、と。

このたび、マルシャルが周到に収集し整理した各種の草稿、校正刷り、異文の数々にまとめて目を通して、ジョンソンと同じ思いをますます強くした。ジョンソンはマラルメの「推敲行為の方向と結果だけを重く見すぎる」ことに警鐘を鳴らし、「マラルメ晩年の散文テキストのほとんどすべてが歴史的事件や制度を論評の対象」としており、「この他者、このアクシデント、この偶然なくして」マラルメのエクリチュールはありえなかった、と断じている。だがたんにそう述べるだけでは不十分で、大事な要素が見逃されてしまう惧れがあるのではないか。さらに一步を進めて、主張の根拠となった原テキスト群、1893年イギリスの週刊新聞「ザ・ナショナル・オブザーヴァー」の求めに応じて連載したフランス語の記事や、1895年2月～11月にかけて雑誌「ラ・ルヴュ・ブランシュ」寄稿の連載記事自体を、『ディヴァガシオン』とはいったん切り離して、発表当時の歴史的文脈のなかに置きなおして検討する必要がある。

そう感ずるのは必ずしも所謂生成論的研究⁽⁴⁾に与するからではない。元記事と『ディヴァガシオン』のテキストを読み比べてみて、決して無視できない幾つもの箇所、正反対の意味になる（なりかねない）書き換えが行われていることに、今更ながら驚いたからである。

マラルメが「密室の哲学詩人」などではなく、若い頃から社交に熱心で、社会問題に相応の関心を抱いていたことは今や周知の事実である。「最新流行」はもちろん、英語関係の啓蒙書？や翻訳は、たんなる金儲けの仕事とは言い切れないし、社交サロン「火曜会」主催者としての顔は決して仮面ではなからう。寡作な詩人にしては膨大な量にのぼる『書簡集』を紐解いても、社交や社会、さらに「大衆」の存在が重大な部分を占めていたことが見て取れる。この強い関心が表明された部分が、消去されるだけでなく、かなりの箇所ですべて逆の意味を表わす言い回しに書き換えられ、『ディヴァガシオン』全体を覆う芸術至上主義、自己や精神の絶対化という主調に合わせようとしているかに思われるのだ。

マラルメは第二帝政時代の偽善と検閲を潜り抜け、普仏戦争の敗北とパリ・コミュンの動乱を生き延び、第三共和制のナショナリズムと帝国主義の拡大に直面する。ユゴーやゾラのように政治・社会活動に挺身する作家もいる一方で、いっそう内向して芸術至上主義を唱え、「自己」を絶対視し、「精神」に沈潜する傾向が顕著に見てとれた。マラルメといえども時代の趨勢から超然としてはいられない。そのテキストには芸術のための芸術意識、純粹詩観、神秘主義、「自己」や「精神」の神格化、反転したエリート意識などが、濃厚に感じ取れる。特に「社会」や「大衆」に対する両義的態度は誤解を生みやすいかもしれない。

そこに気づいてしまった以上、翻訳・注釈の作業はもはや『ディヴァガシオン』のテキストのみを中心に据えて進めるわけにはいかない。今回は既発表部分との文体上、解釈上の整合性も考えて、「孤独」、「対決」、「宮廷」、「庇護」の翻訳4篇をすでに用意してある訳稿のまま提示するが、次回からはそれぞれの元記事を歴史的コンテキストと関連させて詳しく読み直し、注釈を加えていきたい。そして最後に『ディヴァガシオン』の各テキストと対比し、「この葛藤によってこそ何かがしっかりと立っていられるのであり、両状態が互いに衝突しあうと同時に浸透しあっていて、一方が欠ければどちらも効力を失ってし

まう」(「宮廷」)という、マラルメ独特の両義的緊張関係を見極めてみようと思う。

孤 独

文学生活とは、内面に言葉の共鳴と意義をありありと呼び覚ますことに費やされるものこそ本当なのだが、そこから逸脱して俗世間を相手にすると、ただ厄介ごとにしかならないだろう —

もちろん私の謂わんとしているのは、どこかに利得を有していたりしない「詩人」のことであって、彼の製品はただ同然、もともと商売など蔑んでいるのだ。この無償性と軽蔑という両者は、簡素な結び目で繋がっている。これこそ詩人の日常によって保証される奇跡だが、さもなければ逆境に負けて、すべては世間の承認から生まれ、そのまま存続しつつ同時代の精神の豪華さを証明してくれるはずだ、などと称して妥協した末の産物と化す。後者は詩人たるべき運命への違背、少なくとも社会との交渉を求めて詩人たるべき運命に背くことによってしか達成されないだろう、その結果一時しのぎの偶然から、義捐金を引き出せるとしても。

それにこの人物、文芸のために特別に設けられた栄誉にも、さほど食指を動かさない。

同業者との親交は、確かにそういうものがあると認めざるを得ないが — 誰しも、天分がものを言う状況では、ほかのどんな場所にもまして、より当然なことながら、我こそ鑑なりと考えずにはいられない。根本的な滑稽さだ。また、見えにくい、自明なことでもある。他人が機先を制して、芸術をその仕組みといくつかの恵みに手っ取り早く還元してみせる話を聞けるとしても、またその際、徹底的な議論が、とりわけ技術的な議論が盛り上がるとしても、それだ

けで人と交際する値打ちがあるとは思えない。ただし、重要なのは自分だけだと出し抜けに仄めかしてやりたい、そして相手が自らの愚かしい困惑を包み隠し見当はずれに否定するのをよそ目に、自分は礼儀正しく身を退いてほくそ笑んでやりたい、そんな望みから交際する場合は別だ。このような、互いに取り交わされる配慮が、いまなおみんなが集まり意見をやりとりする際の動機になっているらしい。なぜなら、私もそんなはずはないと思うのだが、誰が好きこのんで、幾度も失敗を重ねてやっと一度成功して手に入れた特別の知識を、詰まらぬおしゃべりのために軽々しく漏らしたりするだろう、一確かに、我々の謎をしっかりと築き上げるためには、ただ一度の成功だけで充分なのだ — さらにまた、成功への手順を説明したり公開したりして、芸術の奥義には比ぶべくもない世俗的栄光など求めようとするはずがない。

成功への手順を公開するという、まことに奇怪な決意に作家がとられるのは、次のような場合だけである — すなわち自分一人の楽しみをとことん追求した末に — この遊びがまさに彼だけの楽しみとなるよう、世の人は見て見ぬ振りをしてほしい — この先見の明に乏しい作家が否応なく「先生」と呼ばれるようになり、日々の夢想から抜け出さざるを得ない場合であるが、このとき彼は先生という呼び名が自分の前で本気で囁かれたと信じこんだわけで — たぶんこんなお笑いぐさはこれっきりだろうから、腹の皮が振れるほど笑い転げていただきたい — さらに言えばこの呼び名が几帳面な謹直な男を指していて、当然その男は持ち前の礼儀正しさから、とんでもないと打ち消すよりも、弟子たちに与えるにふさわしい、ごく一般的な二、三の教えを実際に示してやることによって答える方がよいと思ったのである。まるで、若者は誰も皆、先行者というか先輩の前に出ると、自主性の精華を維持できないと言わんばかりだ。すなわちこの場合、接近は互いの敬意を表すものなのである。そして、ともに活動領域を同じくしているという安心感が、年齢を異にする者

同士にも近付きが失われぬようにと歩調をそろえた散策の間に交わされる、とりとめのない言葉からさえも生まれてくる。初老の男も若者も、互いに控えめな態度をとることで得をする、つまり、時間の進行通りに一つの時代から次の時代へという、自然な人生の向きとは逆向きの動きを互いに尊重するのだ。教育というのは、それを授ける側も受ける側も等しく束縛する。しかし著作を通して私的に行われる場合は別だ。教育とは、このようにつねに私的な行為にほかならない。まことに、それは祝祭にたとえられる、— この祭りを精神の外で行うものはない、— そしてなんとという陶醉であろうか、新参者と先達者の知恵が融合するさまは — 今後為すべき努めは、こうした婚姻にふさわしい書物を刊行するだけ、思惟する人々同士の握手という、身内の同意にふさわしい書物を刊行することだけだ。不滅性こそ、文学者が千年後まで生き残るあかしだとすれば、真正な詩人は、まさに歌うたう喜びに浸りつつ、ある世俗の主題を論ずるのに適用しうる直接的会話を越えて、純粹無垢の形で声を張り上げる喜びを味わいつつ — 彼が未来における自分の歌声の何らかのこだまを聞き取るとすれば — そのこだまを予め聞き取るのは、各世代の人々が、青春のとはば口でしばしの間陥る危機においてよりほかにあるまい — 幼少年期が終わりを告げようとする頃、子供が嘆声を発して男でも女でもない乙女になる、あの青春のとはば口で。学校、教会、公式文書など、まことに結構なもの認められている一切とは無縁なところで、つかの間出現するエリートたちが照らし出す、代々受け継がれてきた丸天井を備えた、いわば精神内の修道院で、それは行われる。今日すでに未来そのものである人々に対して、経験を盾にとり、いかにも勿体ぶった華々しきで語ろうとするのは、虚しいことである。あるいは、誰であろうと、もしそういう状況に立ち至る者があるとするれば、彼は、次のごとき一つの至上の規則を蔑ろにしていると云わねばならない — すなわち、たとえ永遠なるものといえども、そこから詩想を汲み出す機会とする以上に、いつまでも拘泥してはならない、そうではなくて、はっきり言うが、その諸様相の一つ、言語の詩的脈を明示するのに必要なだけ、なにか固有の文体を手

に入れなければならない。その後すぐ、術学者たる危惧が兆したのは小学生の時分だから、また小学生に帰ってやり直さなければならない — そうすることにより、これまで拝跪していた人々を面食らわせ、ついには肩をすくめさせ、驚きのあまり両腕を高くあげる仕草さえしている彼らの前で、自らを多面的なもの、非個人的なもの、そしてもちろん匿名のものとして、守り抜くために。

広く同業者と交際した結果でち上げられる流派や、集団的教育の末に知識をひけらかす術学者を育てるのが関の山の学校という陥穽からなんとか逃げおこせたとしても、まだジャーナリズムという罫が、人の喜びそうなことなら株価の大暴落からごく個人的次元のスキャンダルまで、なんでも世に広めてやろうと待ち受けている、そのジャーナリズムが好奇心に酔っぱらったあげく — 逆上して明日まで待てぬらしい — 慌ただしく使いを寄越し、ここからさえもなにかご託宣を聞き出そうとするのへ、「いったい何事ですか」と訊ねれば、「実はあなたのお考えをお聞かせ願いたいのです…」 — そう仰られても、私は率直に言って何も考えておりませんよ、今までだってそうでした、万一考えることがあるとしても、そのときには私の瞑想をパイプの煙と一つに溶け合わせて、瞑想も煙も次第に虚空に消えていくさまをうっとり眺めやった後、机に向かい詩作に取りかかるのですが、一旦消えたそれは新たに詩篇のなかに、やはり模糊としたヴェールに包まれて姿を現すことになりましょう — そう答えて件の葉巻を客に勧めると、この専売品はこれを銜えている間は言葉を発することを許さず、どんなインタビューもすべて自分で背負い込んでくれるはずなのだが…。[…『句読法』についてのお考えを]「そうですねえ」やむなく厳かな口調で「確かにいかなる問題もこれ以上に重大なものはありません。定めら

れた記号を使うか否かで、散文か詩句か — 命名すれば、我々文学者の芸術は結局詩句に尽きるわけですが — 両者の差が生じるのです。詩句の方は記号なしで済ませます、そんな印刷術の手段を借りないでも、発声の際のリズムの切れ目が自ずと心の弾みを調整する特権を持っているからです。反対に一般の散文の場合はどうしても句読法が必要であり、私の好みからすると、真っ白なページの上に適当な間を空けてカンマやピリオドの図を描き、次にそれを組み合わせ、いわば思考の譜面となる方が、— びっしりと文字の詰まった本文より好ましく思われるほどです、逆に厳めしく文字を連ねた本文の場合なら、それが聖書のように崇高なものであろうと、詩句に倣って句読法などなしで済ませばずっと暗示力が増すでしょうに」そのほかいろいろと駄弁を弄することもある、どんな言葉であらうと、ちょっとでもそれを口にしたが最後、自分一人小声で囁いている限り説得力に富み、思慮深く真実のものであるのに、たんなる駄弁と化してしまうのである。まあそれもよかろう、結局それこそ客が、彼が、知ろうとしたことなのだ、この同輩は私が下した判決を有無を言わせず持ち去り、彼の新聞がこの問題を細大漏らさず報道しようとする頃は、私が十編の記事で同じことをする準備中だからと注意する間も与えない、その報酬は — フランで、私はそんなものはまったく欲しくないのだが。いわば彼は危険を冒して魔物が住むという洞窟へ足を踏み入れ、脆い抜け殻を強引に引きずり出していったのだ。「ほんの一言ご意見を」彼は藪から棒に飛び込んでくるやそう要求し、その一言を手に入れると、してやったりと頭上に振りかざしかねない様子で、「ご意見の要点だけを一言で」つまり、利口な彼のことだから自分が何をしているかはちゃんと心得ているはずだが、装飾を一切省いた一言、苦心や気取りのない一言、ということだ…。「一言でといわれてもね、無理ですよ」または「ちょっと待ってください、そんな不躰な言い方をしないで」彼は身を退く「せめてほんの少し曖昧さを加味するまでね」

以上の一齣を、わざと余白を多くとり、前後から切り離して示したのは、いわば幕間の座興のつもりであり、作家の卵がとらわれがちな気持ち、すなわち彼を教育して後継者を育てるのに熱心な大家連中に寄り添おうとする気持ちへの冷やかしを遙か遠くまで誘導せんがためにほかならない。書くというたぐいまれな実践こそ、文学者の生活を他から際だたせるものであるが、逆に言うただ書きさえすれば誰でも我こそは文学者なりと大きな顔をしていられる、もともとそういう通俗化の危険のある書くという実践が、さらにこの場合には新人の側からも大家の側からも、ともに悪い影響を蒙ることがはっきりと分かるのだ。つまり両者とも同じように停滞し、進歩をやめてしまうのである。もちろんそもそもの動機は、大家の側では新人に助言してやろう、新人の側では大家に敬意を表そう、という善意に発するものには違いないが。作家のごとく理想を天職とする人士は、青天の霹靂のように作家たる使命に目覚める幼少年期はやむをえぬとしても、一人前の文学信奉者となり、ものを書くという同じ儀式を見いだした以上、徒党を組んで密談にふけるのは控えた方がよろしい。一人前になった後は、どういう方向に進もうと各人の思いのままだ…。ただし次のような方向だけはさげねばならぬ、かつて使命に促されるまま、ずいぶんと世間並みの仕事に就くことを断念したが、それらの仕事と並んで、それらの仕事の代償に、しばらくたってから、心中ひそかに育みつづけているものとはなんの係わりもない、得体の知れない地位を不当な手段で獲得することだけは止した方がよい。我々文学者の義務は、なにものにも左右されない、どんなものであれ不純で不快な勤め口など忘却して、木立の茂みが森の景色を繰り広げている、その茂みの陰で進められる。あるいはまた、孤独を胸に秘めていくのであればそっとしておいてくれる郊外のアスファルト道のうえで進められる。

それなのにもっともらしい理屈をこねるのは、何故なのか。最前の幕間劇で、闖入してきた探訪記者が、私に一言意見を求めて言ったとおり、たまたま例外的にうまく口に浮かんできた文句、うまくというのは、いろいろ重要なテーマを論じていて、言葉のリズムが幸いにも自ずから明確な線と輪郭を描き出してくれる、ということだが、その文句を彫琢するためでなければ一練り返すと、いったい何故なのか、同業者諸君、私がこんなことを申し述べるのは僭越かもしれないが、あえて推測すれば、沈黙のうちに、自分だけのひそかな楽しみの伴奏という形でのみ魅惑を発揮するものを、さも仰々しく歌い出したりするのは？そんなことをすれば、様々な真実の集合にじかに手を触れてバラバラにし、散逸させてしまいかねない、真実の集合とは、そう、音階のように整然たる状態で並んでおり、演奏にかかる前に打ちならされる和音のようなものなのだ。いやむしろ、真実の集合はまずは完全な沈黙を守り、歌曲と同じく言葉からなる芸術に向かって飛翔する潮時を待ちかまえているのだ—魔術や靈感とは無縁なところで。しかしたんにおしゃべりなだけの人間だと、ある審美的な意見を述べるとき正反二重の立場のうち一方のみを強調しがちで、しかもたいてい弁舌さわやかにまくしたて、なかなか素敵ではあるが、やはりそこから一種の愚かしさが割引される。というのも、物事の本質を為すイデーとは、人魚の尻尾がくねくねと右に左に波打つように、紆余曲折と矛盾に満ちており、期待に胸躍らせて人魚の尻尾を見やれば、たんなる人魚の尻尾にすぎないのでがっかりするように、結局は見かけ倒して人をがっかりさせるのも決して意に介さないからだ。ただ、その尻尾を人目に曝すのだけは承服しない、尻尾を隅々までひけらかし、万人の眼に触れさせるのだけは承服しない。

あるとき、二人の男が語り合っていて、二言三言話す間、いかにも同じことを話題にしているかに装いながら、正確にはどうもそうではないらしく見えた

ことがあった。そういう事例を教訓として悟ったからだろうと私には思われるが、対話者同士、自分の本心を全面的にうち明けたり、相手の話にも胸襟を開かず、心底耳を傾けたりしない場合が多い。むしろ逆に、互いに術策を弄し虚勢を張り合って行われるこうしたやりとりは、かつての鷹揚な精神の、いまでは時代遅れになった、いわばバロック的戦いの名残であり、文学がその直接的洗練にほかならない精神世界にふさわしいものといえよう。対話者たちは、話し手側では自分の考えを明らかにすると同じ分だけそれを隠そうとし、聞き手の方では相手の話していることとは別のことを執念深く聞き取ろうとする——自分の全体性をあくまで守り抜くためだ、たとえ親しいつきあいの必要上顔を合わせることになっても事情は変わらない。

対 決

夏に倦んで、すべてが眩く眼を射る前、朝まだき田園に憩いを求め、不眠の疲れを癒そうとする。さてその一日は、思い思いに、田園の積み藁、小川、林をめぐりて歩を運ぶことから始まった。散策の足はいつもきまって工事現場に遮られ、人夫の肌に光る汗は、まるで朝露が消えやらず生き続けているようだ。いつものとおり、見方によって貧相とも筋骨逞しいともいえる男が、腰を曲げて土仕事をしながら、横目を使う。「こんなところまでいったいなにをしに来たんだ？」と問いかけているような目つき。悪意と蔑みが籠められているわけだが、どちらも、苦勞して生きている者が遊び暮らしている者に向けるぶんにはまことにもっともながら、私は、同じこの世に生をうけた者として、こうした歪んだ感情の偏りは正していただきたいと思う——正直のところ私にしても、誰かが日の出頃から掘り続けてきた穴を見下ろす小高い場所に立ち、いかにも目立つ恰好をするのは、気がひけるだけなのである。

この眼差しが私に向けられている以上、そらされないうちに急いで問いかけ

になにか一言返答してやらなければならない、それもひたすら親身な立場からの、簡にして要を得た返答だ、たとえ実際に言い合いになっても、このしがない労務者が否定し得ないように。「いいかい、君は手押し車一台分の土を掘り、それを遠からぬところまで運んで捨てる、つまりいったん為し遂げたあと同じことを今度は逆に行うと、それが新しい仕事になって報酬がもらえるわけだ」と。

大地と人夫との間の契約では、どのような労力もいったん提供された以上、たとえ契約解除に伴うものであろうと、必ず相応に報いられなければならない、ということがあらかじめ定められていたのである。

いわばこの人夫は、いま自分の墓穴を何処の大地に掘っていようと、そこから甦生してくるのだ。

努力すればしただけ必ず報われるという、確かな保証に祝福されつつ。

さて私とその役を務めたいと思っているもう一人のほうは、どうやら、労働の結果がそのまま小銭には換えられない手合いのようだ、なぜかといえばきっと彼が売り物にするのをためらうからであろう。詩稿はほぼ書き上げられていても、やがて反古にされてしまう — だから君、羨ましがることなんかないのだ — たとえ客には傷物に見えなくても、私のなかの親方が、仕上がった品を駄目だと言えば。

人生の一日が無になる、と言うか少しばかり死滅したわけで、そうと知ったら君はどんな叫びを発するだろうか。もっとも、先行きに対する似たような宣告がどこかのお偉方の名で告げられたりすると、憂さ晴らしに泥酔して、君はしょっちゅう仕事を休むけれど。

そんなふうに幾分か死んでも同然の羽目に陥るとするのは、古の神への生け贄の名残だろうか、こうしたリスクがあるだけで、彼と私の境遇の不公平を正すに足りよう。

相手方の仕事は動かしがたく確実に直接の手応えがある — それは同時に私の場合も明らかにしてくれる。なるほどわれわれ詩人は靈感を受けられた者だが、あまりに性急にわずかばかりの詩神の贈り物、つまり詩才に飛びつき — これを使いこなすには長年の厳しい修行が要するのに — そもそも詩人の天職が人間社会のなかでどういう根本的な役割を果たしているか、見過ごしてきた。いま唐突に、壮年期まで等閑に付されてきたそうした方面の理解が、外面によって指示されざるを得なくなった紳士の心に生まれたところを人は目撃するのだ。

そろそろ真昼時近く、夏の太陽の金色の日差しが、地上の人間どもの頭上から垂直に降り注いでいる。その光は、やはり普遍的な至高の力の象徴である神の光に似ているが、久しく顕現していないため人の心に兆した神の光への懐疑の闇を、かわりに天に昇ってきた陽光がついに追い払ってしまったともいえよう。懐疑の闇が兆し始めたというのは、いわば、人々が神の光に盲目になり、絶対を見失った、たんなる中間的存在として漂うことにほかならないが、見失われつつある神の光に取って代わって、赫赫たる太陽が軌道を描きながら登りつめようと目指すのは神の全能なる力 — その輝きこそ本来唯一無二のものであったのだが、揺るがぬ信仰が過去のものとなったいま、寂然不動の真昼に輝き渡るには時代遅れなものとなつてしまったのだ。

（神の光に代わって中天に懸かろうとする太陽の金の光は、現代における全能の神ともいべき金銭の輝き）しかもそればかりか — 太陽の金の光は、その剥きだしの輝きに打たれて直ちに降伏し、臣下の礼を表明する者に対して（神のごとく裏切ったりせず）堂々と即金で支払ってくれる。

だが同時に、別の種類の（内面的）栄光を目指すなら（金属の発する光がまさにその内面的栄光が外へ輝きでたものであって欲しいが）是非とも必要なのは — 少なくとも誰かが一人離れて金銭の問題を検討し、それが全能の神の身代わりになっている理由をあれこれ探し求めることである。さらにまた、誰の手も届かない自己の内面に逃げ込み、金銭の光芒がそこまで追いかけてくるかどうか確かめるのだ。このようにあえてみずから実験台になってこそ、その人物は金銭が真の神であるかどうか決めることが出来る。すなわちこの場合、というのは中間的存在たる群衆を消去し自己と神とで直接交渉する場合に、貨幣などはたんなる残り滓にすぎず、思想こそ最も重要なエッセンスなのだ、この神自身にいやでも認めさせるしかない。— その後でなら、私的な花押を捺した法に従って行動しても、誰憚ることはなからう。

こういう任務は —

いったい誰のものか —

この試みを、精神的渴望ではなく飢えというもっと不確かな次元にまで貶め、一市民がこういう任務を発見し、創設し、いわば横取りすることもあるが、そうでなければ —

「詩人」こそ、つまり純然たる文学者であり、独自の才能の持ち主にほかならぬ詩人こそ、この職務に就くべきである。

好ましい午前だ — なるほど昨夜の不眠の疲れはまだ消えていないし、私の潜在的分身である職人との折り合いもつかないうち、その職人は私のなかでとうとう存在を主張するに至り、いまここで掘りあげた穴に半身を埋めている人夫こそまさにその職人を体現しているのだが — 私は彼を置き去りにして退散するべきであろうか、彼が絶え間なしに振り上げては打ち下ろす鶴嘴が、見晴るかす野原一面キラキラと輝くばかりの「大金」にさも似た金色の陽光に向かって、機械的なお辞儀を繰り返しているのを後にして？一点の曇りもなく、彼の目をじっと見つめる私の目は、この大地の富を慎ましく信じこんでいる者へ、まさしく謙譲の礼を示している、ああ願わくは、言わず語らずに見交わす眼と眼のうちに、固い握手が読みとられんことを！ — というのも、二人の人間同士で取り交わされる最良のものは、互いに話し始めたが最後、つねに取り逃がされてしまうからだ。

表現とは、おそらく文学の仕事なのだ。

それゆえ当然のことながら、帰宅後文章を草し、午前中経験したことを後日のためにごく簡単に証拠立てておこう、すなわち太陽が激しく照りつけるある日、文人が特別にとるべき態度を、文人と労働者を区別する違いのなかに、どうやら弁えられたようだ、と。

文学という優雅なもの、このうえなく優雅なものが、さらに一つだけ残されていた華麗さで一層強められる、すなわちその優雅さが正金の輝きに対抗して存続するということだ、いまを盛りと咲き誇る花、人間という土壌から咲き出した花として。この詩華の花は、特定の名こそないものの、(王権のように)

他のなにもものにも優るいくつかの特権を持つ。

抗議の叫びを發して反対を証言するなかれ。

文学という一種の技芸はもともと話し言葉に端を發するとはいえ、最後にはその話し言葉を遠ざけ、いわば言葉の通貨ともいうべき日常語の流れに追いやってしまいかねないのに、反対を唱える諸君は思い誤ってこの高度な技芸を一時しのぎのやりくり算段に貶めてしまうわけで、たんにそれだけならば一見いかにも興味深げなジャーナリズムとそっくりの性急な考え方だ—

そんな騒々しいジャーナリズムとは逆に、ささやくように慎ましく歌う詩人たる私は、ただ溜息を吐くのみ、すなわちこの病的喧騒を癒すには静寂療法しかなく、その静寂を遙か彼方まで漲らせようと、私の驚きを溜息に託してそつと発散させるわけだ。なぜ驚いたかといえば、森羅万象を表現せんとする賭けにも似た文学行為のためにわざわざ厳密に整えられた状況を、ジャーナリズム流の言葉の使い方は、通貨による無難な取引の水準まで再び引きずりおろしてしまうからである。実に不思議だ、精神力の絢爛たる発動には及ばずとも、わずかな直感力さえあれば間違わずにすんだはずの、まさにそこで間違いを犯すとは！世間では、文字の道 (carrière des lettres)、文筆業という言い回しが示すとおりの、文字を職業として選びジャーナリストの道を前進しようとする者がいるが、文学とは本来平坦な道を前に進んでいくものではないから、この言い回しの carrière なる語は、太陽が常の高さまで登りつめていくのを讃える詩人の用法に倣い、天体の運行という意味で使われるべきだ— 太陽は今しも中天に懸かろうとしている— 要するに太陽と同じく文学は上昇するものであってたんに前進すればよいというものではないのである。こうした職業を選んでもそれを全うすることは滅多にできるものではない。理由はさまざまあるが、そのひとつは、中天高く昇って行くにつれて大気が希薄になっていくように、文筆

で暮らしをたてているうち才能が次第に枯渇していき、その結果才能の不足を補う穴埋め作業を強いられる羽目になるからであって、ちょうど新聞のページ最下段を占める連載小説が穴埋めのために文章を引き延ばすのと同じことだ。真正の文学者として一生夢を追い続けるものの仕事ぶりは虚飾も気取りもなく、一途に率直である、それゆえ、どこでもまあまあ出来栄えだと受け入れられる中途半端な妥協の産物だとか、この期に及んで勝ち得た思いがけぬほど過分な讃辞だとか — はっきり言えば自分のためにしてもらう宣伝、つまり自分はなにか徽章のようなものがどうしても欲しい（こうした欲望に抵抗するのはなかなか素敵なことだ）、自分に勲章をくれるよう請願する、と大々的に広めてもらうことにほかならないが、これらの取るに足らぬ些事も、またもちろん自分の生業から多大の利潤をなんとかして上げようとすることも、真正の文学者という英雄たらんと努めなければならない者にとって、しかもその場合それらの些事など無視してかかる必要があるから、すべてたちまちにして頼りないわべだけのものに見えてくるのだ。そのわけはなによりも、本来本人が身を捧げた奇蹟とは、まず靈感の訪れで始まり、ついにはまわりに選ばれた人々のみからなるグループを形成することで成就されるからである —。

売れ行きを問題にするのはもってのほか、詩人たるべき人間が魂を売り物にして不正な利益を上げることなどあってはいけない、万一魂を売りに出したりしたら、彼は悟りを開けなくなってしまう。

通貨という万人共通の金属も、万人共通の日常語のように、一掴みほどはどうしても必要であり、詩人はそれによって生計を立てるのだが、その前に、いわば中世の神聖な語り部、聖母の軽業師よろしく、みずからの曲芸を、物語を、完璧に仕上げてください。つまり神にも紛う金銭のなんたるか、また日常語のなかの金とも謂うべき詩語のなんたるかを、体得するはずだ。

したがってそこにはいかさまをしてやろうなどという意図は毛頭ない、手管を弄して金銭をごまかしたり、ありもしない尾鰭をつけて話を捏造したりする気は毫もない、その手捌きはむしろ、心の中の理念を形あるものにする指使い、ちょうど彫刻家が塑像を創りあげるために粘土や石膏を撫でさする指使いに譬えられよう。

宮 廷

方々の音楽会で演奏される崇高なさる交響曲の旋律は、華々しい輝きを喚起するさまざまな音のなかを曲の主題が波うち進みながら署名する花押にも譬えられようが、後世に残る偉業によって末代までも記憶されるべきいかなる苗字といえども、この花押には比ぶべくもあるまい。

高貴なものは、今後、(昔の貴族階級とは違い) 特定の名前など必要としないくなるだろう。

かくして、(音楽に代表される) 非在の夢によって顕現する輝かしさと相携えて、非個人的な栄光の感情が生まれる。それに、現代において命名者の資格を得ようと思っても、「選びの壺」などと言いながら、打てども響かぬ投票箱のなかへ名前を書いて入れるむなしい行為の他に、その資格を得る手だてがないのだ—

(新しく顕現する高貴さは) かつての貴族が所有した財産などはいっさい持たない。

富がものをいう、昔風の領主の権力とはいっさい無縁なのだ。たとえ誰かが富を誇って、自分もひとりの人間である以上他の人々と関わりがある、富をつかって祭りをを行い、他の人々にも富を分配してやろう、彼らはどうやら(富の

なんたるかも) 弁えていないらしいから…などとうぬぼれた考えを抱くに至っても—。そんなうぬぼれとは逆に、富という誰もが頼る手段を手放し、その価値を疑問視してみることこそ、貧窮のなかで、一人きりで味わう高貴な楽しみへ通ずる第一歩なのだ。選ばれたものはすべて上方にある、と言う、なるほどそうかもしれない。それが下界に映ずると逆さまになるらしく、選り抜かれたものほど下にくるようだ。そして、現代社会の基盤とはまさにこのような等価関係に存するのであり、この等価関係がなおほんの少し、高きもの、低きもの、慎ましさ、豪勢さの位置関係を示してくれるとしても、すべては両義的なのだ。

(昔の貴族が好んだ「赤い踵」にならって言えば) 金銭の踵を偏愛する成金貴族も、徹底して無視されるに至る。いまや優越性を求める試みは、まず世俗のさまざまな区別の上に均等な翼を広げ、それらをすべて消し去ることから始められる—

それに関しては—

本質的なものだけを渴望する芸術作品こそ、世俗的な野心や利権の追求とは真っ向から対立するから、まさにうってつけだ。

さてこの文は、ホットニュースを適当な冷却期間をはさんですっきり見通せるようにし、ゆとりのあるルポルタージュに仕立てる試みで、この試みに後押しされた関心がさまざまな事実に向けられるまま、私はいったん舞台から消えたはずの貴族が再び登場してきているという話題を採りあげているわけだが、話の先をやりとりの言葉どおりに続けてみると—いやまさしく。— どうやら貴族もある種のものには必要のようで。— そうらしい。— なかには早速それ

にとびついている連中もいる。— 歴然たるものです。こんな真似をするのも、貴族なるものが、微妙で深い段階においては、決しておめおめと引き下がりはず、どうしても必要なものだと思っていればこそだ。さらにまた貴族が必要となるのは、今世紀の行く手を、雪解けの泥濘さながらに塞いでいる不名誉な過誤を、手引きして一掃しようとする場合であろう。

（この過誤は）不平等をとことん廃する行き過ぎた判断、すなわち公平さへの好みから生じたものだ、私はそう証言する—

こうした誤解が、はたしてまことに起こったのだろうか！むしろ、公平さという原則の行使に行き過ぎがあったのは、明らかに術策を弄してこの原理そのものを歪めようとする策謀だったのではないか。

いまや公平さの原理の信奉者は怪獣ヒュドラさながら、手のつけられないほど巨大化しているが、その周りを取り巻く霧を払い、正体を顕す手助けをしよう。

かつて大衆に怒号するかのように、だが実際には沈黙のうちに（ペンの力の背後に隠れて）こう煽動したものがあって、「すべては— 国の財産の— みなさんのものであり、みなさんに自由に利用してもらえよう努めねばならぬ」。ところがこれとはっきり指定してやるものがなかったので、芸術をあてがったのだ。見当違いも甚だしい、商いに精を出す連中、鶴嘴を振るう連中にとって一日の仕事がどれほどしんどいものだったことか、（仕事の後は芸術どころではなく）財布を枕にひたすら眠りこけるだけだろう、財布に詰まった硬貨が快い響きをたてるのを夢のなかで聞きながら。なおそのうえに芸術的な夜の集いにまで名を連ねたりするゆとりはあるまい、その集いは昼のように明るい光に

照らし出されて、日々の不滅性を告知しているようだが…。一方、農夫よ、君もせめて憩うがよい、君の暮らしの素朴さはおのれの作ったものがそのままパンとなる、自給自足の確かな仕事によって祝福されており、麦畑を照らす金色の太陽は光のトランペットさながらに四方八方に光を反射し、パンのもとになる麦の束を彷彿させる壮麗な花火を空いっぱい打ち上げている。

ああそれなのに、いったい何者であるか、群衆を餓えさせておいて餓えを芸術で満たせると錯覚させ、暴徒のように芸術へおびき寄せたのは？

膨大な群衆と釣り合う規模で、粗壁に金泥を塗りたくった芸術の擬似神殿が建立され、まことしやかに振る舞って、新たに侵入してきた群衆の足をその虚妄の緞帳の前で止めさせても、全員退屈しか感じまい。というも、もしそんなものが奇蹟だったら、むしろない方がましであり、各人の心の奥に細々と灯り続けてきた芸術信仰の火も、ついには消えてしまうからだ…。一番いけないのは芸術の模造品よりもその大衆化なのだ — この点ではかつての大衆への誓約は果たされたわけだが — すなわち誰もが知っているとおりの、いわば縁日の群衆が味わう満足、まさしく野次馬の期待に添う華々しい公開行事のなかに求められるべき満足が、元来厳密な性質のものでそんな満足には縁遠い文学という、かけがえのない遊びに名を借りて広く流布しているのである。たとえば、病に冒されかさぶただらけの銀行が黄金色の膿を垂れ流して倒れると、無邪気な新聞売り子が改善策を載せた新聞を、その手中で炸裂する爆弾よろしく打ち振りながら街を練り歩く、こうした演目が — 一種切れになれば、足踏み状態にある議会の記事だ、舞台裏まで入り込んだ隙間風が内閣の危機の騒動を聞きかじって楽しげに送り届けてくる — 日刊紙を舞台にした見世物を構成する、だがこんな見世物は人間本来のドラマとはいささかも関わりはない、人は人間本来のドラマに盲目なのだ。

この見世物はちょうど新聞の見開き分に収まるほどに矮小化され、誰にも手っ取り早く分かりやすくできており、まことに重宝である。

以上のことを言い換えると、確たる根拠もなく群衆をこのような種々のまがいのへ駆りたてるうさんくさい指令は、「(真の芸術のために) 選ばれたる者」が進み出してくるとき、その進路を群衆に塞がせて妨害することをねらっているのではなからうか。いま「選ばれたる者」と言ったが、進み出ようと望む者なら誰でもよいのであり、「君」でも「僕」でもかまわないのだ—要するに他にかげがえのない個人ということであって、さまざまな社会変化も革命も、この個人の名において、彼がこの世に生をうけた以上自由に支障なく生き、ものを知ることが出来るようにと、遂行されたのである。「選ばれたる者」のなすべき務めはただ一つ、人間としての尊厳を明らかにするために、証拠として傑作を提示することなのだ。というのも、こうした尊厳の立証は、あいにくながら群衆の手に委ねるわけにはいかないからだ。彼、「選ばれたる者」は一切を予告すると同時に一切を要約している。都市の各地区ごとに一字ずつ神殿を建立していても、その神殿がいかに宏壮だろうと、住民全員を収容しきれはすまい。いわば、「選ばれたる者」の奉ずる掟にとって大事なものは、誰かひとりだけがすべての人々になり代わって至聖所に到達しようということなのだ。誰かとは、憂慮すべき運命の底から、聖地巡礼の旅に出るように召し出されてきたもっとも謙遜な者にほかならない。最後の者が、精神的に彼以前のすべての者を集約するわけだ。これくらいで十分だろう、正義が満足して小躍りし、正義の意に適いその訪いを受けた美しき対象を、ほのかに照らし出すためには。だが私の耳にはこんな抗議の声が聞こえてくるようだ—その意思はどこから来るのか！(私は答える)—その意思たるに申し分のないものから。(また聞こえる)—「選ばれたる者」の運命が)なぜ彼に与えられてこちらのもう一人ではいけないのか！(再度私は答える)—こちらの人も彼と同じようになれま

す。要するに「選ばれたる者」とは、同時にこの兩人であり、さらに多数でもあります。私はそうあって欲しいと思う。あなたは投票用紙を手にして選挙という当世風制度に依拠せよと勧めるが、あなたの仰る選挙とはまるで工場労働と変わりませんね。なぜかという、私には分かっているのですが、あなたはなにかを選ぶときに、神秘というか、神意のようなものが介入してくることを、とくに恐れていらっしゃるからです。

貴族制、この辺ではっきりこの言葉を口にしておくべきだろう — 民主制という、今うるさく喚き立てられている言葉に対抗して。両者の相互対立はつねに国民同士に葛藤を生じさせるが、この葛藤によってこそ何かがしっかりと立っていられるのであり、両状態が互いに衝突しあうと同時に浸透しあっていて、一方が欠ければどちらも効力を失ってしまう。

例えば古代ローマのコロシウム跡から掘り出された金貨なども、表面には温雅な顔が浮き彫りされているのに、裏面は誰にでも適用される露骨な数字を剥き出しにしている。

ただ、この新しい貴族階級を成立させる条件だけは、様々に変化するだろう — そんなわけで、一陣の風が、ここでは具体的な歴史には立ち入らないけれど、まことに結構な突風が、こちらでは聳え立つものをひっくり返し、なぎ倒し、四方八方に吹き散らすかと思えば、あちらでは飛び散った尊い塵をそのまま虚空に舞い漂わせる。こうした特性、すなわち選ばれたる者たちの構成が全く定まらなくなったために、官製だろうと伝統的だろうと、一個人が特別扱いされることはない。千人ほどの者たちが皆同じ資格で、あるいはほとんど同じ

資格で聴衆集団を形成し、美しきものありと聞けばどこへでも移動していく。すなわち傑作が彼らを呼び集めるのだ。その集まりにおいては、当の傑作の制作者であろうと、なにかの設立集会か同業組合集会のように特別の地位に就こうとは毛頭思わない。彼は姿を見せても、譬えて言うなら、聴衆に背を向けたままで、いわば匿名の状態を保つオーケストラの指揮者にふさわしい態度をとるか、—いつ何とき飛び出してくるか分からぬ天才の前を遮らないように—あるいは、舞台に立ちたくなければ、半円形に開かれ出入り自由な観客席に戻って、その列の中から舞台を眺める。

一つの傑作と選ばれたる者たちとのこうした緊密な関係を、王と貴族からなる「宫廷」という語で表してみようか—しかしむろん現在の「宫廷」は昔の王のような一個人の周りを飛び回ったりはしない、傑作の制作者たる個人が精神的天賦からみてまぎれもなく王者たるに相応しかろうとも。

愚か者は外来の隠語を歪めて用い、上記の選ばれたる者たちを「スノップ」呼ばわりする。だが歪められて具体的内容が空疎になった状態のほうが、人を馬鹿にする意味を持つ本来の状態よりもまだましかもしれない。件の意見、というのはつまり私の意見だが、その意見によれば文学者はスノップどころか、具体的な行動を自分自身の意思で書物のみに限定し、その間なものにも煩わされない自由な時間を確保しようとする。とはいえそう言う私にもやはり、恩寵のように自ずから流露するものが訪れることもあるのだが、ただし爾後性急に進展しそうな直接的なものには、つねに警戒を怠らない。これも務めへの忠実さの顕れであり、一般に大衆と呼ばれてきた者の不足を補おうとしてのことなのだ。

そうした務めを導いてくれる手本は「音楽」という新しい宗教であろう。「音楽」は不可解な陶醉をたやすく生み出すその神秘性ゆえに、新宗派を結成しえ

たのである。そこで私も文学と大衆とのあるべき関係をさぐるこの覚え書きを記している間、そのありさまを彷彿とさせてくれるイメージもしくは伴奏として、たえず脳裏を去らない「音楽」を思い続けてきたのだが、まさしく演奏会の階段栈敷にこそ活用すべき人的資源が存する。

そこに来合わせた一群の人々が首を差しのばして身を震わせる喜びは、私の求めるものの先蹤にほかならず、見習うべき果敢さと数々の特質が含まれている — 差しのばされた首が期待を裏切られ、また引っ込められることが多いとしても。というのは、気を引くような開演前の口上の後、陰々滅々と演奏が進み、ついには呵々大笑してやろうかとさえ思うほどなのだ、したり顔に頷く空想的な婦人帽の真珠飾りのうえに、滑稽さの雷が落ちるように。

芸術と大衆の関係をさぐるこうした務めに、いまや都市が着手しつつある。都市は未だ芸術の真の神殿を建立するに至らず、いや戒律さえ定めるに至っておらず、目下見るとおり未発達な状態にあるものの、劇場の階段栈敷のように幾層もなすアパルトマンに住む住民たちの好奇心 — たんなる好奇心だけかもしれないが — の中に、あるいはその期待の中に、熱心な集いを催すに足る動機を見いだしたのだ。なにしろ都市は公正中立が建前ながら、とりわけ芸術の驚異に、なんらかの象徴的形姿を借り受けなければならないからである。

ある意味で、そして以上の点からして、都市は芸術に対して次のようにするのが望ましい、すなわちいわば正装に身を固め、禿頭に乘せたままとらないでいる平等主義的な真っ黒い平形帽を脱いで、芸術に一礼すべきである — 何に對してであろうと、軽くしておくべき礼を。

庇 護

王制が終焉し、兩次帝政も過去のものとなした現在、もっとも高貴な制度、

厳粛にして壮麗な祭儀的制度といえは — 国民を代表するというあの「フランス下院」を思い浮かべる向きもあろうが、当世風直接選挙によるこの制度は、いまなお存続しているもう一つのものに比して品位に欠けるといふべきである — いつまでも名前を出さないでいるのも不屈きなので申し上げれば、「アカデミー・フランセーズ」こそそれである。

この最高の制度に以下の dithyrambe (讃歌) を捧げよう、讃歌を表すのになぜ dithyrambe というギリシャ語源の言葉を用いたかと言えば、アカデミー・フランセーズが古代ギリシャのアカデメイアに因んでいることのほかに coupole (円天井) を戴いているからだ、すなわち coupole のもう一つの語義、葡萄酒の醸造樽もしくはその利き酒用グラスという含みに、dithyrambe の語源 dithyrambos の酒神バックス讃歌という意味がよく噛み合うからなのだが —

「アカデミー・フランセーズ」はフランス的な方針に基づいて創立されたのであり、その独自の構想ゆえに、会員たちはこうした制度が世界に冠たるものと誇りにしている。つまり「文芸」の絆に結ばれて多様な努力が公に顕彰されるのである。技師、財政家、科学者、戦術家を問わず、みな文明人として — これに勝る呼び名があろうか — 自分の業績を簡単な巻物にして — これは前時代の着想をほぼ踏襲したものだ — フランス語で記し、「国家」に提出する。その恭しい様子は古の気高い時代の浅浮彫に見られるものにそっくりだが、自ら丹精込めた精神の産物の初物を、身の丈よりも高々と捧げ持って献呈することは、ある意味で栄誉に相当するわけなのだ。そこで崇められているのは次のごとき一つの掟である — 対象はすべて文書に限り、文書に帰属するものとす

る。(ここで少しばかり歴史に触れると)「アカデミー・フランセーズ」がルーヴル宮殿の一角に創設されたのは、記録によるとフランス国民の実際的かつ誇り高い趣味が華々しく開花する前夜のことであったが、いうならば自己の特権をあくまで守り抜こうと眠れる獅子が目を覚ましたのである。ほかの一切のものから敢然と孤立したのである。(その後十九世紀の初めにナポレオン・ボナパルトが)中樞をなすものとしてであろうと、この「アカデミー」を「学士院」のほかの諸部門と同列においてしまったのは、明らかに政治の不敬な手に汚されたことになる。この勅令はむしろ効力なきに如かず、その命ずるところとは反対に、芸術諸部門並びに産業諸部門が、自分たちの仲間数に、「アカデミー」というほかのものとは決して相容れない部門を紛れ込ませないようにし、「アカデミー」が独占すべきシャンデリアを天井から取り外したりするのを禁ずるほうがよいのだ。さて間をおかず一足飛びに、将来「アカデミー」が蒙りかねない危害を占ってみよう。権力の座をねらう様々な政体の綱領に記されているある一日、「学士院」がいかにも当世風にあらゆる種類の活動の機能を完備し、直接選挙制による阿鼻叫喚に対抗して終身名誉を保証された身分の中から厳粛な行動原理を汲み出す「元老院」にも取って代わりかねない勢いを示すとしても — 「学士院」がそのようになり、そのような尊厳を帯びるに至ったとしても、私の予想では、そうした「学士院」のいわば包括的な半円形会議場の中心を、さながら聖域のように占領する「アカデミー」、それも必要な場合に限り — すなわちこの選良たちが定例選挙を執り行う間 — 聖域に座するのに同意する「アカデミー」は、依然としてなにか特別な、もしくは希少価値のある行為、誰にもしかとは分からぬ行為に忠義だてして、それを守り抜こうとうちに引きこもり、警戒の眼を光らせ続けるであろう。あらゆる知的活動全体と一緒にたにされ、卑近な現実世界の中に陥落しても、「アカデミー」はなお会員たちに奇行と隠遁を命じ、修道生活めいた生き方を押しつけるであろう。

いわば絶対者として自己の内部に「君臨」する者、それが「精神」である— 書物とはこの精神の辿った軌跡にほかならず、いまは廃絶された王宮の各部屋に昔の主人たちの肖像画が飾られ過去の栄光を讃えているように、書物もその主人たる精神の栄光を讃えているのだ。したがって書物を収める書庫も、そのように考えられるべきであろう、つまりそれは余人には入り込めない奥の院に安置されるべきなのだ。そこに、神々の列に加わるように、しかじかの著作が並べられていく。あるテキストがどれほど多くの読者を動員しようと、ごく少数の識者だけは決してそれに付和雷同しないものだ。だから精一杯大声で読み上げ、世に普及させよう。だがあいにく最悪のケースとなり人々に黙殺される羽目になっても、学識の墓ともいべき書庫の中では、ひたすら自分自身とのみ向き合った書名の金文字が燈明となって輝くだろう— この輝きは栄光なるものの個人を超越した要約だが、この書名とそれを又聞きで知っている一般大衆との間には、暗黙の敬うにたる了解が通い合っており、これだけで充分ありがたいことなのである。その書名を知らぬ者は誰もいないのに、墳墓を守るように立ちはだかる扉、すなわち書物の表紙の抗議に逆らってまでそれを開こうとするものも一人もいない。その抗議とはこうだ、「(この聖域に入りたければ) 死者となれ、ただし世にいう死に方ではない、おまえにも分かち与えられた夢、それを他者の中にまで伝播させることによって死ぬのだ。すなわち「巻物」(書物)となり、そこに鎮座せよ。

この「部屋」、ところでこの「部屋」は精神的なものとしてあらゆる人々の記憶の中に存在し、誰もがその富に気づいている—

この理想の書庫に収蔵された傑作群、その塵を拭いとることは、ただ心の中で思い出すことによってそうする場合のほかは、所詮無駄な務めである、それらの傑作自体が理想の翼を羽ばたいて塵埃を払い落とすのだから。鴝の神聖な羽箒で塵を払われることさえ、この理想の翼の羽ばたきは拒むのだ、装幀本や羊皮紙文書の並ぶありふれた書庫の背景の中に、クロコダイルやエジプトマンガースのミイラの置物と一緒に、鴝の羽箒も飾られていたりするのだが。

ここで生者たちは何をすることになるのか？彼ら「アカデミシャン」はほとんど生者ではない、と厳正さを刻印された扉銘は語っており、彼らを幽霊に擬しているが。

一種の「サロン」とも言えよう、こう呼ぶのが手加減した言い方なのは百も承知だが、それにしてもなかなか洒落た言い方だろう。別にいうなら、儀式張って彼らが語り合うのはまさしく審美談義だが、ご婦人のたてる笑い声などは聞こえず、木霊となって広まることのない題目についての審美談義なのである。むしろ世間の評判はこうだ、彼らは墓のような過去の遺物に閉じこめられた選良たちであり、墓のうえに広がる枝の代わりをなすのは文章の裸の統辞構造で、散り落ちた言葉が埋め尽くす辞書という平墓石を見守り続けているというのだ。あるいはまた、彼らを指す暗喩に拘れば、その一人が現実に死去した場合、いったん不死の身になった人が再び死にさらされたわけで、この二度目の死に不安になった彼らはすぐさま登壇して選挙を執り行う、その選挙で後継者に選ばれた者は、いまや場違いな亡霊と化した前任者の欠を、当の亡霊のみに納得のいく表現で埋め、同時に対立候補だった相手には攻撃の鋒を収めるように仕向けて、自分が不死の人たるに相応しい様子を見せようとする。こうした光景が見物人に示すのは一種の神話的壮挙であり、あのフェニックスが燃え尽きた灰の中から執拗によみがえる神話を、人間が自分に可能な形で演じてい

とも言えるかもしれない。

すべての不都合の根源は、突き詰めると次のごとき取り違えにある、すなわち不滅なのは「アカデミシャン」だと思われているが、そうではなく著作のほうなのだ。

もちろん私は、そこで会員としてときめく身の上になったことはない、それなのになぜちもいないお喋りをするのか、また、なにを話の種にしたらよいか、考えてみる…。そう言えば前に一度、さしたる成果は上がらなかったものの、この場を借りて放言をさせてもらったことがある。あのときは一つの確かな企てに対する無頓着さをたしなめたいと思って、古典作家が後世に残した財宝を「文学基金」に役立てる提案をしたのであった。なにしろこの財宝ほどの浄財はないし、文学基金事務局のメンバー諸氏こそその分配者にして受託者にほかならないからだ。こうした根強い考えが古典的大作家から私へと伝わってきたのは、彼らのテキストを学校で習って以来、彼らが永遠の時間の中で生きているゆえに抽象的、普遍的、非個人的存在と化し、著作権を継承する身内はいないと手抜きなく見て取ったことであり — だからこそ喜んで自ら賞讃演説を述べ、彼らアカデミシャンにならって幾行かの総合文をしかるべき長さのうねりにまで押し広げ、いわゆる黙説法に留意し、神秘性を大切にしたりしたのであった。これらの戯れにまるで偶然出会ったかのように、本能のままにそうしたのである。

ところで、「アカデミシャン」という貴顕集団に関して、一つの状況が現れるかもしれないが、それは彼らの特権をますます高めることになる—

そもそも「社会」とはこのうえなく空虚な言葉であり、前時代の空想社会主義者の遺産にすぎないが、少なくとも次の点では好都合で落ち着けるものである、すなわち「社会」なるいかめしい概念が厳しく規定する内容に相当するものはほとんど全く現実の世界に存在しない以上、それを話柄にするのは、実のところいかなる主題も論じてはいず、論争に倦んで口を噤むのと同じことになるのだ。なにかが欠けているというまさにそのことによって、相対立する諸力は荒々しさを殺がれ、またいかなる意味においても一つの抽象的実体にあまり深く拘泥する危険がなくなる。いわば「社会」は空無と化すわけだ、あるいは虚空の閃光といってもよい、大衆はこれこそ自分を庇護してくれると思って走り寄ってみれば、たんに人を欺く体のものであったので恐慌を来すだろうが、この世ではどんな装置だろうとこうした空虚さを自分の得になると見て、不当にも守護を願うのである。本来なら、(書物という)知的厚紙装置こそ、衆目の一致して認めるごとくそのようなものとして絶頂を極めるべきであろう、この装置は、誰がありがたがり誰が罵倒しようと、分け隔てせず迎え入れる、擁護もしくは反対 — どちらでも同じ — に動き回る者が身にまとう一挙手一投足の効果は、舞台上の役者というところだが、役者もやはり人間としての内実は空虚であって — 彼が足拍子を取りながら台詞に調子をつけるのは、舞い上がる床埃で台詞に詰まったりしない限りはまことに結構。まさしくそのようなものとして、作詩の技巧は示されるのだ。

以上でやっと論点が定まった、だがなおその道の玄人たちの合意がいる一

事情に疎い統治機関がこの寓話的存在に紛れ込んでくると仮定してみよう、

するとこんなことが生ずる、いやその前にもう少し仮定を進めると、事情に疎い統治機関が紛れ込んでくると軌を一にして、一冊の書物が出版されたでしょう、その書物は社会から見て恐ろしいほど甘美であり「これは美しい—あれはまずい」という審美的判断によって言い渡される判定には収まりきれず、得体の知れない、非人間的かつ異様なものであり、すべての事物は単純・素朴にそのありのままの姿を呈すべきだと叫びたてるその書物の激怒もしくは恍惚の声が、いわば絶対的な甲高さで—あまりに甲高いので怒りの叫びか喜びの叫びか区別がつかなくなり、両者とも抗弁の余地なく皮肉だと思こまれかねないほどだ—発せられたとしよう。さてその結果はといえば、書物の作者が逮捕される、しかしとんでもないことだ、みなさま方—「アカデミシャン」諸氏に向かって言っているのだが—作者本人はもちろん、彼の作品すらそんなふうには扱ってはならない。なるほど作者は密接に作品に結びついた存在には違いないが、それとても作品を世に問うことによってやましいことのないパンを得ようがためにすぎない。これまで身分と天職が彼に対して下した裁定のみを承認しつつパンを求めるならば、パンのほうも駆け引きなしに追認してくれよう、と申しても嗚呼、みなさま方、異を唱えなさるには及ばない、べつに勲章や褒美が欲しいと言っているのではない。すなわちひたすら公正に彼は出頭する—といってもふつうの裁判所へではない、実際に低頭する者など一人もいない、むしろある思想を擁護するためであって、だからこそ自分の同輩の前へ出頭するのだ。みなさま方以外はすべて忌避される。そうして彼は裁きを待つのだが、率直に言わせてもらえば、その裁きの文書が早急に作成されるのを是非見たいものだ—

これを要するに「社会」という関係や「社会」という単位（統治を目的として伸縮されるが、どっちみちつかの間のものにすぎない）は一つの虚構なのだから、もっとも虚構とは本来文芸の管轄で—その神秘的もしくは詩的な原理ゆえに—だから書物を維持していく義務は少しも損なわれず守られなければ

ならない。

さらに私はみなさま方になり代わってこう付言する、件の書物が（たんに維持されるだけでなく）あらゆる規則に合致し、書物独自の無数にある複雑な技術を忠実に墨守したものであればよいのだが、と。嗚呼みなさま方は、やれ婉曲話法だ、教訓譚だとレッテルを貼ったり、また引喩を磨いて明晰にしたりするという日常の仕事から抜け出て、白日のもとに姿を見せたのだ — いわば仕事の余暇ということになるが、これは実は停滞でも無益でもない、というのみみなさま方はそうして保持しおおせたさまざまなお手本を、直感的に、全くなにも知らずに、天才の天衣無縫さのままにそれらのすべてを使いこなしている者と、引き比べることになるからであり、みなさま方はその裁かれる当人が適切にしてのけたかどうか判定するわけだ。ところでこれは私の意見だが、判定に当たってはあらかじめ対象が少なくとも仮綴じ本の体裁をとっていなければならぬまい。

こうしたページが書物の外にあるという想定には根拠がない — どうか「詩人」の差し出口をお許しいただきたい、そう申すのも私はある意味で自分の権限外の領分にまで首を突っ込む「詩人」という役割を引き受けてきたし、また同じく裁判官たちを熱烈に持ち上げたりしたので、はた迷惑に感じたに相違ないからである — 彼「詩人」がみなさま方「アカデミシャン」を、あたかも国家反逆罪やクーデタ（ただしこの場合精神的なものだが）に遭遇したかのように狼狽して、祖国の力（軍隊）の堂々たる発展の首座、あの侵すべからざる場所に、恭しく呼びおこしたのである。しかしいまや彼「詩人」の信頼はさらに進み、そうした救いを得んと願って一つの大権を献上し、著述の危急存亡のときにはこれこそ真正銘の救い主であると断言し、この文学上の「主権」に対してこう強く要求する、みなさま方がみずからの驚ペンを手に取り、さながら翼を打ち広げたように、たとえ弱々しいものであっても、ペンという剣を林立

させよ、と。

注

- (1) マラルメの「牧歌調」、早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」第百十号、2001年3月25日発行、93-119頁。
「非難」、「修道院」、「魔術」— マラルメ『ディヴァガシオン』翻訳・註解— 早稲田大学政治経済学部「教養諸学研究」第九十四号、1993年3月31日発行、31-44頁。
- (2) *Œuvres complètes*, éd. B. Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2 vol. 1998-2003.
Igitur, Divagations, Un Coup de dés, éd. B. Marchal, coll. Poésie/Gallimard, 2003.
- (3) Barbara Johnson, *A World of Difference*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore and London, 1987. pp. 57-67 (*Erasing Panama, Mallarmé and the Text of History*)
バーバラ・ジョンソン、『差異の世界』、大橋洋一、青山恵子、利根川真紀訳、紀伊国屋書店、1990. pp. 108-131 (第7章 パナマの抹消— マラルメと歴史のテキスト)
- (4) この方法によると、作品のプロット、シナリオ、下書き、草稿のすべてが、それぞれに自立した一つのテキストとみなされ分析の対象になる。そうすることによってまずは最終稿へと向かう直線的方向付けを断ち切り、次いで最終稿自体の「説話論的」連続性に亀裂を走らせるのだという。権力の求心力を弱体化させ、分散させようとする政治的意図が透けて見える考え方だが、フロベールの仕事などに適用されてなかなか魅力的な成果を挙げている。